

TIJ 日本語教育研究会通信

No.48 2012.5.16 発行

発行: TIJ日本語教育研究会事務局
東京都葛飾区新小岩1-17-10
Tel:03(5607)4100 / Fax:03(5607)4102
E-mail tij@tij.ne.jp
TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



今年は春の訪れが遅く、桜が満開になるのが例年より遅れたようですが、開花した桜は気のせいかな例年より素晴らしく見えました。東日本大震災から一年経ち、なかなか復興が進まない中で、原発をめぐるあちこちで議論が展開されています。また、近いうちに大地震が起こる可能性が指摘されるなど、外国人を日本に引き付ける材料がなかなかない状況が続いています。でも、世界一高い電波塔である東京スカイツリーを建設する技術や、世界中から人気を集めているアニメなど、日本の持っている技術や芸術を求めて来る人たちがまだまだたくさんいます。その人たちが勉強しやすい環境、生活しやすい環境を作るお手伝いができたらと思います。

前号でお伝えした通り、TIJ が設立されてちょうど 20 年の節目になるのを記念して、2 月 11 日に設立 20 周年記念式を行いました。本号では、そのご報告と参加された方の感想を掲載いたしましたので、ご覧ください。

また、3 月 1 日には TIJ に在学中の学生たちのスピーチ大会を開催いたしました。本号に優秀者のスピーチと審査をしてくださった方の感想を掲載いたしました。

【本号の内容】

1. TIJ 設立 20 周年記念式開催
2. TIJ 設立 20 周年に寄せて
3. 瞳の輝き
4. TIJ 設立 20 周年に当たって思ったこと
5. 20 周年記念式在校生発表のご報告
6. スピーチ大会優秀者スピーチ
7. スピーチ大会に参加して

TIJ 設立 20 周年記念式開催

広瀬万里子 (T I J)

2月11日にT I J設立20周年記念式を開きました。当日は、会場いっぱいに来賓の方、卒業生、在校生、現旧職員・講師が集まってくださり、和やかな雰囲気の中で、20年を振り返りながら、交流ができました。

記念式は、下記の式次第に従って和気のうちに進行されました。

I . 第一部

- 1、開会あいさつ
- 2、理事長挨拶
- 3、名誉所長挨拶
- 4、歴史スライドショー
- 5、活躍する卒業生スライドショー
- 6、在校生発表



理事長挨拶

II . 第二部

- 1、地域別交流会
- 2、閉会あいさつ

T I J 設立の数年前に、いわゆる「就学生」という「大学、大学院、専門学校に進学するために日本語学校に在籍して日本語を学ぶ外国人学生」が生まれ、当時日本語学校があちこちに作られていました。その時代の流れの変化を見て、就学生ビザができる以前から日本語教育に携わっていた高柳名誉所長（設立当時は所長）と、インドシナ難民の支援をしていた徳倉京子事務局長が、徳倉理事長の経営面での協力を得て、他の日本語学校と一味違った学校を設立したいと考えました。T I J 設立の目的は、1. 日本と母国の架け橋になる人を育成することと、2. 日本人と外国人が共に暮らす社会作りでした。徳倉理事長は20年後の世界を当時から見越して、「日本は過去において中国に対して大変な過ちをおかしてしまったが、20年後中国が日本をきつと追い越す時代になるだろう。そうなったときに、日本と中国の架け橋になってくれる人を育成したい」と言っていたらっしゃいました。また、高柳名誉所長が当時から言っていた「共生の社会作り」という考え方も正に先見の明を持っていらしたと言えます。そして、数十名の評議員と賛同者の方々の応援を得て、1991年10月にT I Jはスタートしました。実際面でT I Jが他校と違っていたことは、当初から多角的な日本語教育を目指し、行っていたことです。多くの日本語学校が進学生コース一辺倒だったのに対して、T I Jは1. 進学生コース 2. 企業研修生コース 3. 一般コース 4. 日本語教師育成 5. 日本語教材開発 という複数の柱を最初から立てていました。2～5はそれ以前から高柳所長をはじめ教師たちが他機関で行っていたことで、そこに時代の要請に従って1. 進学コースを加えたものでした。しかし、この進学生コースが、結局は、一番大きい柱に育っていったといってもいいかもしれません。20年経った今、大勢の卒業生に囲まれたとき、教育の原点はやはり「人を育てる」ということ、「人は宝」だとこの日に痛感しました。



開会の挨拶



歴史スライドショー



活躍する卒業生の話



名誉所長のお話



上級クラス学生の寸劇



地域別交流会



二次会

TIJ 設立 20 周年に寄せて

旧職員 大森瑛子

TIJ 設立 20 周年の記念式、交流会に参加させていただき、ありがとうございました。設立の準備の段階から 15 年間、関わらせていただいたことを改めて深く感謝しております。

椅子や机をはじめ、教室、職員室、事務室などの設備、図書の購入、などを考えることも、どんな人を対象に日本語教育をするのか、どういう風に受け入れ、どんなお世話ができるのか、全て一から考える経験をさせてもらい、毎日が盛り沢山の初体験で、わくわく、どきどき緊張の毎日でした。就学生が来るようになると、彼らの生活のこと、アルバイトの問題に始まり、日本語の授業内容、進学相談などは現在も同じことだと思いますが、学生それぞれいろいろな問題にぶつかる度に胸を痛めたことを懐かしく思い出します。そして私の力の及ばなかった数々のことを申し訳なく思います。

TIJ は 20 歳。ようやく一人前と言える年月を重ねてきたということでしょうか。これまでこの TIJ という小舟は世間の波に揺られ、時には沈没寸前ということもありましたね。日本は世の中が好景気のときは外に対して門戸を開き問題が起ると、急に閉じ始める。学生の受け入れについても政策が転々として、日本語学校はそれに翻弄されていました。今も状況は変わらないようですが、そんな中で TIJ はしっかり根を伸ばし、張ってきたとこのたびの記念式に集まった方々を見て感じました。

TIJ は学生達によって育てられてきたという思いを強くいたしました。100 人を超す卒業生がこの記念式に帰ってきてくれたことは本当に嬉しいことでした。おそらく来たかったのに都合がつかなくて来られなかった方がまだまだいたのではないかと思います。

来日直後の短い 1 年か 2 年を過ごした学校のこととはそれほど心に残っていないのではないかと感じていましたが、故郷に戻るように来てくれたように感じました。TIJ 時代は彼らにとってとても厳しい時期だったと思います。家族から離れ、言葉に戸惑い、生活に苦しみ、人間関係につらい思いをした頃に、助け合った友人、声を掛け、支えてくれた先生達。いろいろなことが詰まった TIJ 時代を人生の特別な起点として、大切に思っていたと話してくれました。

そして、これからも機会をつくって TIJ の仲間と会いたいという声が聞こえてきたことは本当に嬉しいことです。

TIJ を創られた徳倉京子さんがどんなときも学生達の側に立って、一人一人の世話に尽くされたことが TIJ の礎になっていることを忘れないで欲しいと思います。言葉の教育の原点である「人との繋がり」を大事にしながら、TIJ がさらに成長されることを期待しております。

瞳の輝き

来賓 中島宏

寄席の小咄に、「けちな男がいた。二つある目を両方とも使うのはもったいないと、片方を封印した。使っていた目が見えなくなったので、封印を開けたところ、世の中知らない人ばかりだった。」というのがある。

私が子供の頃、壺井栄の「二十四の瞳」という小説が評判になった。太平洋戦争前後の不安定な時期に、瀬戸内海の小島にある、小学校の分教場に赴任してきた若い女性教師と、12人の生徒たちの有為転変の物語である。この小説の題名は、「二十四の瞳」でなくてはならない。「十二人の生徒」ではいけない。

これらの例からも、「目」は単に見るための器官ではない。言い古された通り「心の窓」である。「目は口ほどにものを言い」とか「目の色が変わる」、最近では「目じから」など、目にまつわる言い回しや単語は、同じ顔の道具である耳や鼻と比べて圧倒的に多い。

さて最近、日本人たちの瞳に輝きが少ないと思う。政治に対する不信のせい、経済低迷のせい、度重なる大災害のせいなのか。加えて万端にわたり、マスコミやその分野の専門家といわれる人たちの多くが、まずは現状を否定し、歎き、自虐的に反省の弁を述べて知識人としての存在感を示そうとしている。これでは人々は、瞳を輝かす端緒も見つけれない。

「ところが、・・・」である、先日「TIJ 創立 20 周年記念式」に出席させていただいたところ、お会いした全ての人の瞳がキラキラ輝いているではないか。私は久しぶりに、こんな元気な人たちの中であって、心が和んだ。瞳を輝かせていたのは、卒業後、日本の会社で中国との取引で成果を挙げた青年や、内モンゴルで幼稚園を立ち上げ、成功した女性など、限られた人たちばかりでなく、誰も彼もが TIJ と係わったことを誇り、それによって新しい人生が開けたことを喜んでいた。

私は、会社生活を終えた後、中国、浙江省の職業高等学校で日本語を教えた。言語の実践教育のクラスは、12人 MAX と教えられていたが、教室に入ったところ、50人を超す学生がわいわい/ガヤガヤと座っていた。熱心に勉強しようとする学生も、行き掛かり上出席している学生も混じっている。そこで、それぞれのタイプの学生に、相応の学習効果を体験させてあげようと思案した結果、授業中だけでなく休み時間も放課後も、できるだけ一対一で向き合うチャンスと時間を多く取るように工夫した。その結果、時間つぶしに座っていた学生の目も次第に生き生きとし、私と日本語に興味を持つようになってきた。

もちろん TIJ の生徒たちは、自ら進んで入学し、自分のお金で勉強しようとしているのだから、私の学生とは心構えが違うのであろうが、創立 20 周年記念式で出会った TIJ 社中の面々の瞳の輝きは、それだけの理由で生まれたものではないと思う。彼らが TIJ とそこで教える先生方の努力に対して抱く、尊敬と信頼から自然に生まれたものに違いない。

TIJ の歴史を伺うと、開校以来、常に社会的背景に適切に対応されてきた一方、生徒一人一人の生活にまで心を配って指導されてこられたとのこと、このような哲学を学校も先生方も一貫して実践されてこられたことが、TIJ 社中の活気あふれる瞳に凝縮されているのだ。

平成 24 年 2 月 11 日は、単に日本語を教えるに止まらず、着実に国際相互理解を築き上

げられた TIJ の思想と姿勢に心を打たれた一日であった。

TIJ 設立 20 周年に当たって思ったこと

2002 年 3 月卒業 胡英琪

ついにこの日がやってきた。2012 年 2 月 11 日は特別の日だ。というのは、今日は TIJ 設立 20 周年記念式の開催日だからだ。ワクワクした気持ちで私は記念式に向かっていた。

ふと思えば、もう 12 年前のこと。片言の日本語しか話せなかった私は、桜満開の季節に東京にやってきた。TIJ で日本語の勉強を始め、沢山の事を学ばせていただいた。当時の学生生活は今の生活とはだいぶ違っており、十数年前の事でもあったので、もう忘れたと思いきや、当時の事はまるで昨日のこのようにワーンシーンずつ頭に蘇ってきた……。

日本に来た最初の頃、人生で初めて経験する一人暮らし、しかも慣れていない異国の地。そのストレスで私はホルモンバランスを崩し、顔にひどいニキビができた。それを見た西野先生が、学校の近くにあるクリニックの皮膚科に連れて行ってくださった。その日の夜、自分の部屋で日記を付けながら泣いていた…。

大学受験の時、受験勉強の疲れと志望校をなかなか絞れない焦りから、自信を無くし、やる気を起こせない私がいた。それを察してくださった当時の担任の渡部先生は学校が終わった後、夜遅くまで進学について親身に相談に乗ってくださった。寒い冬の夜に、暖かさを感じた。

……

「皆さん、こんにちは…」私を深い回想から呼び戻したのは、懐かしい広瀬先生の声だった。TIJ 設立 20 周年の記念式が始まった。待ちに待った瞬間が来た。そういえば、私たち 2000 年 4 月の就学生の入学式も卒業式もこの会場で開催されたのだ。あれから 10 年以上経った今日の会場には、在学時の 2 年間で共に過ごした先生達、TIJ に新しく入った先生達、ほとんど顔も名前も知らない在校生達、そして今日の記念式の為に世界各地から駆けつけてきた卒業生達で溢れていた。歳月が経つにつれ、変わってしまったものもあるが、この会場にいる皆が感じているはずの、今でも変わらない一つのものがある。それは「TIJ 愛」だ。この「TIJ 愛」があるからこそ、在校生達は生き生きと留学生活や勉学に励んでいける。この「TIJ 愛」があるからこそ、卒業生達は世界各国で活躍できている。また、この「TIJ 愛」があるからこそ、過去何度も高い壁にぶつかった自分が救われてきたのだと思う。

TIJ は私の原点であり、私の心の支えでもある。TIJ 設立 20 周年記念式に参加し、再び「TIJ 愛」のパワーをもらった私は、また新しい気持ちで旅に出た感じがした。きっと、その旅先で TIJ 設立 30 周年、40 周年…の記念式が“待っていている”と私は思った。

20周年記念式 在校生発表のご報告

松下美智子・祐川知子（上級クラス担任）

例年、上級クラスは春節の前後に行われる文化交流祭りにおいて故郷紹介等の発表をしていますが、今年は文化交流祭りに代わって同時期に開催される20周年記念式で発表を行いました。準備の様子とそこで感じたことをご報告します。

年が明けてすぐ準備にとりかかったものの、教師側も何をすればよいか明確ではありませんでした。この20年間の世界の出来事について調べて発表するのはどうだろうかと提案してみたところ、「そんなことは卒業生も来賓の方々も知っているからおもしろくない。」と学生に一蹴されました。今回の記念式の目的の一つ（学生にとっては一番の目的）は卒業生と在校生の交流だから、先輩が知らない今のTIJ、今の学生の様子を伝えたいという意見が出され、相談の結果、TIJで学ぶ全留学生を対象にしたアンケート調査と寸劇の二本立てに決まりました。教師の押し付けではなく、目的を理解した学生達自らが考えて決めたことで、その後の準備がスムーズにできたと思います。

アンケートの作成と実施は全員で行いました。国籍・年齢等10項目の選択式の質問と、日本に来てから困ったこと・嬉しかったことを自由に述べてもらう質問票を作成し、一对一のインタビュー形式で実施しました。練習を兼ねてクラス内でやってから他クラスに向かいましたが、日本語でうまく答えを引き出すのは相当難しかったです。特に自由回答の部分は不十分な内容でした。アンケート結果の集計・分析と発表用原稿の作成、パワーポイントでのグラフ作成はそれぞれ担当者を決めて個別に指導しながら進めていきました。後に述べる寸劇と違い個人作業なので気の毒な面もありましたが、分析しながら自身の経験を思い出し卒業前にTIJで過ごした2年間を振り返る良い機会になったようでした。パソコン操作については学生の方が詳しく難く完成しました。

その他の学生は初級・中級・上級の3チームに分かれて各レベルの教室・学生の様子がわかる寸劇の内容を考えました。初級チームは学生が最もよく発する言葉のひとつ「大丈夫です」をキーワードに大丈夫ではない状況でも大丈夫と言いながら日本に慣れていく様子を、中級チームは、進学を心配しながらも気心の知れた級友たちと若者らしく恋の話に花を咲かせる様子を寸劇に仕立てました。どちらもクラス内でよく見かける風景ですので、学生達は楽しみながら意見を出し合い準備を進めていました。最後に上級チームですが、上級らしさを表現するのはなかなか難しく一番苦労していました。最終的に当時話題になっていた「東大が秋入学へ移行」という記事を読み意見を述べる新聞の授業を再現しましたが楽しみながらというわけにはいかず、教師も参加しての SCRIPT 作成はさながら実際の授業のようでした。こうして SCRIPT 作成までは順調に進んだものの、そこで満足したのか、練習に飽きたのか、「完璧でなくても大体できていればいい」という日頃の学習態度にも通じる彼らの姿勢に声を荒げてしまったこともありました。それでも先生になりきった先生役の学生の頑張りもあって徐々に形になっていきました。

不安な気持ちで迎えた本番でしたが、当日指示される前に舞台袖に並びセリフのチェックに余念のない姿を見て、彼らの成長が感じられとても頼もしく思いました。暗記をあきらめ読み上げになってしまったアンケート発表等心残りもありますが、発表後の彼らのや

り遂げたという満足げな表情を見て本当にやってよかったと思いました。

進学先が決まらず落ち着かない学生や欠席がちの学生がいる中で、今回クラス全員を巻き込んで発表に向かって準備できたのは、今の TIJ・自分達を知ってもらうんだという思いが共有できていたこと、発表の後に地域別交流会や二次会で感想を聞くチャンスがあったことが挙げられると思います。ディベートやプレゼンテーションの授業はありますが、やはり本物の聞き手を相手に反応を予想（心配）しながら本気で日本語を使って表現する場を持つことの大切さを改めて感じました。

スピーチ大会優秀者スピーチ

平成 24 年 3 月 1 日実施



中級第一位

泣かない

付 漢騰

皆さん、どうしてふるさとを離れて日本へ来ましたか。自分の夢のために、でしょうか。私も抱負を抱いて去年の 10 月に初めて東京に着きました。今ちょうど 5 ヶ月経ちました。最初の不安、だんだん間近に迫る進学とアルバイトのストレス、などいろいろな問題に直面します。

日本に来たばかりの時、日本語は全然だめでした。それに資格外活動許可の証明書も取れなかったのです。なので、アルバイトをすることは不可能でした。ですから、今までに、銀行に預けているお金は 1400 円で財布の中には 3000 円しかない、ということもありました。3000 円だけ持って東京にいることは上海で 30 元しか持っていないのと同じです。生活どころか、食事さえできないのです。どうすればいいでしょうか。何度も何度もよく考えて、最後に友達から借金しなければなりません。友達に電話をかけると涙がこぼれてしまいました。日本に来る前、両親と約束して「これから自分の力で生活していきます」と言ったものの、本当に約束を守れるか不安で一杯でした。

それから、皆さん、入学してからの先生との一回目の面接をまだ覚えていますか。その時自信満々に「私は絶対に東大に行きます」と言ったかどうか。私は言いました。けれど、去年の 11 月の留学試験と 12 月の日本語能力試験 N1 を受けて成績は不合格でした。大きいショックを受けました。続けて今学期の面接を行いました。「先学期の目標を実現しまし

たか」「進学先はどうしますか」こんな質問が山のようにあって、本当に緊張しました。でも、自分の夢をあきらめたくないのです。皆さん、同じ経験がありますか。日本へ留学に来て、たくさんの方の困難があるけれど、しっかりして泣かないように、自分の夢を持って、いっしょに頑張りましょう。

中級第二位

日本の職場の経験

スミタ・ギリ

私は5年前に初めて日本に来ました。その前はインドで3年間IT関係の仕事をしていました。2007年にインドの会社から日本へ派遣されました。日本の会社で働いて非常に良い経験をすることができました。会社に入社したばかりの頃、日本語が全然わかりませんでした。周りの人はとても親切で、助けてくれました。周りの人は私が日本で労働文化を理解できるよういろいろ支援してくれました。その期間中に日本の仕事の文化について多くのことを学びました。日本の仕事の文化は外国の仕事の文化と違います。仕事面では、日本人は非常に誠実です。日本に来る前インドで「日本人は働きすぎ」という言葉を聞いていましたが、やはりそうです。日本のサラリーマンは毎日10~12時間働きます。残業は日本人にとっても人気があります。私は請け負い業者だったので、毎日8時間だけ働きました。それから、「会社への忠誠」ということです。今まで私が会った日本のサラリーマンは一生同じ会社で働いています。日本の企業風土は「終身雇用」の概念によってまだ支配されているようです。また、会社で日本の人々についての新しい多くのことも学びました。日本の文化では先輩たちや年上の人たちの話や意見に聞き従います。会社で会議中に周りの人がいつも「はい」「わかりました」だけ答えました。インドの仕事の文化は日本より楽です。インドのサラリーマンは2、3年ごとに仕事を変えています。私もインドで3年ごとに仕事を変えていました。私は外国人だからいろいろ驚いてしまいました。

日本人は恥ずかしがりですから、はじめは知り合いになるには時間がかかります。しかし、ゆっくり私は多くの新しい友達を作りました。しばしば私たちはランチに出かけました。そこで食べ、飲み、いっしょに笑うことをしました。今もときどき外食をして楽しい時間を過ごします。

TIJで日本語の勉強が終わったら、もう一度日本の会社で仕事をしたいと思っています。そのために日本語の勉強をがんばります。

上級第一位

頑張っ、生きよう

傅琴琴

日本に来て、もうそろそろ一年半です。

この間、一番印象深いのはマグニチュード9.0の東北大地震です。日本は地震が多い国ですが、あんな強いのは、はじめてでした。

日本に来たばかりのころ、地震がいよいよ来ました。それまで、地震に対して未経験だった私にとって、うれしかったです。少し揺れを感じて、おもしろいとさえ思いました。

しかし、あれほど大きな地震が来るとどうなるか、私は何も理解していなかったことが、うちに帰って分かりました。うちに帰ると、たんすが倒れ、お皿が砕け、悲惨な状況でした。その様子を見て、私は呆然としてしまい、どうすればいいのか、手も付けられませんでした。

夜、友達と一緒に避難所に泊って、慰め合いました。被災地の様子をテレビで見ると、津波にあった人々は、家を根こそぎ持っていかれていました。悲惨な有様を見て、私自身も、傷つきました。

次の日、被災地の状況は更にひどくなりました。特に、福島第一原子力発電所の原発事故です。放射能が出て、両親は「日本は危険だ。早く帰国しろ！」と言いました。友たちも、続々と国へ帰りましたが、私はずっと日本にいました。一人、部屋で時間をつぶすだけです。

手島葵の「テルーの唄」という歌を聞きながら、新聞を読みました。

「心を何にたとえよう 一人道行くこの心
心を何にたとえよう 一人ぼっちの寂しさを」

こんな悲しいメロディーを聞き、被災地の痛ましい状況を思いました。

私は幸せだと思います。家族や友たちがいて、楽しみや悲しみも分かち合えます。

今後とも、家族や友たちを大切にして、頑張り続けようと思います。

上級第二位

十年後の私へ

孫雪潔

十年後の私へ。

「もう32歳のあなたは何をしていますか？」

「好きな仕事をやっていますか」

「もう結婚していますか」

「幸せに暮らしていますか」

私は今、日本に住んでいます。2010年3月26日に、それまでの約20年の生活に「さようなら」と言いました。なぜなら、その日、私は初めて両親から離れて日本に来たからです。その日は一生忘れられない日になると思います！

日本に来る前、あらかじめ日本について、いろいろと調べて、十分な準備をしたつもりでしたが、いきなり起こることも、初めてのことも、多かったです。まず、日本に来て、人生で最初のアルバイトで生活費を稼ぎました。最初は、給料が少なかつたし、仕事もつらいと感じましたが、「自分が選んだ道だから、絶対に諦めないぞ」と自分に言い聞かせました。

そんな気持ちを十年後のあなたはどう思いますか？

アルバイトの店長の厳しさ、よく叱られました。「店長は頑固な人だな」と思ったんですが、日本に二年間暮らし慣れました。

そして死にそうに感じたこともありました。2011年3月11日日本では大きな地震が来ました。私は避難所に入ってアルバイト先の人たちと一晩過ごしました。お互いに励

まし合って心が強くなりました。これは十年後のあなたでも重要な経験だと思うでしょう！

今の私は日本で恋愛もし、日本に来る前より成長しました。これからも生活は難しいかもしれませんが、これを乗り越えるように頑張ります。十年後のあなたはどのようにしているのかな？幸せならいいな！

スピーチ大会に参加して

伊藤素美（審査員）

まず初めに、昨年に引き続き、今年のスピーチ大会にもお招きくださったことにお礼申し上げます。

昨年のスピーチ大会では、学生の方々が熱心に学んだ日本語で力一杯にスピーチする姿や母国から離れて日本という異文化の中でなにを感じて来たかを知り、胸が一杯になってしまって、審査員という立場で評価することが難しかった思い出があります。今年もお招きいただいて、大変楽しみにしていましたが、審査員ということでしたので、きちんと審査できるか不安でもありました。

当日は会場に入って、実習をさせていただいたときにお世話になった懐かしい先生方にお目にかかり、ご挨拶をして席に着きました。会場にいる学生の方々はスピーチが始まる前の興奮で少しざわめいていましたが、審査員席の後にあるスピーカー控え席に座って居る中級の方々は緊張しているのでしょうか、そこだけは空気がピンと張りつめていました。大会が始まり名前を呼ばれると、背筋を伸ばして壇上に上がり、きちんとお辞儀をしてスピーチを始める様子はとても爽やかで、どの方も原稿を見ずに話されて感心しました。それぞれが自分の言葉で日本での体験を語っていて、大変良かったです。そして、審査員としては優劣付け難く困りました。

休憩があって、上級のスピーチでした。学校にも慣れ、スピーチ大会の経験もある上級の方は張りつめるような緊張はないものの、落ち着かない様子が後ろから伝わってきました。それでも、席を立って壇上に上がりお辞儀をするときには落ち着いていて、さすがに上級生は違うなと思いました。スピーチの内容も失敗を含めて日本での経験の中から掴んだことを反省し、整理して自分のものとして、次のステップへ進む決意となっていて、とても良かったです。こちらの審査も難しかったです。

学生のスピーチが終わってから、TIJを卒業して大学に通っている審査員の方から、大学での生活の話や在学生へのアドバイスがあって、お話の内容も良かったですし、なにより先輩の生の声は進学を目指している学生の方々にとって励みとなったと思います。

スピーチ大会はただスピーチの優劣を競うだけのものではなく、日本語で書く力、日本語を話す力を習得する良い機会であり、進学への道を進むために必要なものだと思います。学生のみなさんが、日本語を磨き、たくさんの経験をして、自分の道を進んでいかれることを願っています。

大会が終り会場を後にするとき、この会を催すためにご準備やご指導をなされた先生方や職員の方の熱意がいかに大きかったかを感じました。参加させていただけて嬉しかったです。